

— 知の泉 —

Castalia

第19号
2012.3

東京外国語大学附属図書館報 Tokyo University of Foreign Studies Library Bulletin



平成23年度附属図書館
特別展示会より

『ゴドモノセカイ』
黒崎義介画 1942年

目次

■ 館長巻頭言「紙と文字」	2
■ 寄稿 「大塚文庫」の誕生	3
■ 寄稿 画面で本を読む	4
■ TUFS-ラーニングコモンズがオープンします！	5
■ TUFS-ビブリオ 地域言語／専攻語の辞書案内	5
■ 学習相談デスクで、先輩に相談してく？	6
■ 平成23年度附属図書館公開講演会報告	10
■ 平成23年度附属図書館特別展示会報告	11
■ 図書館統計(平成23年1月～12月)	14
■ 図書館活動日誌(平成23年4月～平成24年3月)	16
■ 編集後記	16

紙と文字

附属図書館長 栗田 博之

人類にとって、文字の発明は革命的な出来事であった。文字のない世界では、先人の知恵も口頭で次の世代に伝えて行くほかなく、知識を蓄積することはきわめて困難であった。日々のやり取りも口頭でのみ行われるため、口約束をめぐってもめ事が起こると、「言った」「言わない」のやり取りが果てしなく続いた。つい最近まで無文字社会であったパプアニューギニアにおいて、長年にわたって文化人類学的現地調査を行って来た身としては、文字がないと人々の生活にどのような事態が発生するのかを目の当たりにしており、その分だけ、文字が人類の文化・社会にとって持つ偉大なる力を強く実感することができるのである。

文字の歴史は、同時に、文字を記す媒体の歴史でもあった。現在広く用いられている紙という媒体は文字の歴史において非常に重要な意味を持つ。その扱い安さ、軽さ、耐久性等の面で圧倒的に利便性が高く、甲羅、骨、石、粘土板、皮革等の他の媒体を過去のものとして行った。また、印刷術の発明によって、大量の複製が可能となり、限られた人のみが利用して来た文字の大衆化が急激に進んだ。現在東京外国語大学附属図書館に収蔵されているものの大部分は、文字が紙に印刷されたもの、いわゆる「書物」である。かつて書物を読むためには、その書物そのものを手に入れるか、筆写するしかなかったが、コピー機の発明によって、既存の書物を簡単に再現することも可能となった。このように、つい最近まで、文字と紙の組み合わせは最強のコンビであり、これらの技術革新によって、その利便性は飛躍的に高まって来たのである。

しかし、このようなコンビがついに解消されるか

もしれないような事態が現在発生しつつある。文字を電子データ化し、文字そのものでなく、電子データの方を保存したり、やり取りしたりすることの方が一般的になっているのである。その結果、電子データを文字という視覚データに復元するのは利用者が目的に合わせて適宜行えばいいことになり、紙にプリントアウトして読むという旧来のやり方のほかに、必要に応じてディスプレイ上で文字を再現して読むという新たな方法を用いることが可能となった。電子データであれば、コピー＆ペーストも自由自在である。その気になれば、聴覚データへの変換(文字の読み上げ)や触覚データへの変換(文字の点字化)も容易である。文字の保存という観点から、紙の信頼性はきわめて高く(千年のオーダーで保存可能であることは実証済みである)、電子データの保存用の媒体の信頼性は未知数(発明されてから十年のオーダーしか時間が経過していない)であるが、電子データであれば、複製が簡単にでき、次々に媒体を変えていくことが可能であり、高密度な媒体を用いれば、むしろ紙はかさばって困るというような贅沢も許されるようになった。これらの点で、電子データ化された文字には、紙に書かれたり印刷されたりした文字にはない圧倒的な利便性がある。実際、学術雑誌は次々にオンライン・ジャーナル化し、電子書籍の普及も進んでいる。かさばる紙を保存しておいて利用するというかつての図書館の姿は間もなく過去のものとなるだろう。東京外国語大学附属図書館もこのようなコンビ解消が間近に迫った時代にあって、その姿を徐々に変えて行くことが求められているのかもしれない。

エジプトやスーダンなど、アラブ社会の人類学を中心に、日本の中東・イスラーム研究に大きな足跡を遺された大塚和夫先生は2009年4月29日、半年にわたる闘病空しく、脳幹梗塞のために亡くなられた。享年59歳。亡くなる前年の秋には「社会人類学の分野において幅広くかつ独創性に富んだ研究を行い、文化人類学一般、さらに中東やイスラームを対象とする地域研究、宗教学など隣接人文・社会科学において重要な学術貢献をした功績により」紫綬褒章を受章されており、3年に及んだアジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)の所長職も09年3月末で任期満了となることから、ご自身も周囲も、先生が再び研究に専念できる環境に戻られ、以前にも増して内外でご活躍になることを期待していた矢先の悲報であった。

先生は2005年に心から愛しておられた母校・東京都立大学を後にされ、本学に移られた頃からしばしば「自分はもう若くない。早く研究をまとめないと」と口にされてはいたものの、還暦を前にしてのご逝去はご自身まったく予想外のことであったに違いない。他方、残されたAA研所員にとっても、先生の急逝はすこぶる大きな痛手となった。現職の所長が任期半ばで突然の病に倒れ、教授在職中に急逝するという、過去に例を見ない事件に遭遇しただけではない。AA研は主にアジア・アフリカを研究する言語学者・人類学者・歴史学者・地域研究者から構成されているが、大塚先生は単に人類学ばかりでなく、歴史学・地域研究の中核を成す中東・イスラーム(教徒)研究、アフリカ研究のリーダーでもあった。つまりAA研はこのとき、組織と研究の両面で、研究所を代表していた「顔」を一度に失ったのである。

特に、当時本学が全学一体となって推進していた「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の受けた衝撃は大きかった。本学はもともと、他大学の追随を許さない数の中東研究者・イスラーム(教徒)研究者を抱えているが、このプロジェクトでは、2005年度から5年間に渡って文部科学省の特別教育研究経費を受け、名実ともにわが国随一の中東・イスラーム

(教徒)研究教育拠点を築く計画でおり、そのリーダーがほかならぬ大塚先生だったからである。しかもプロジェクトが突然代表を失ったとき、拠点形成計画はすでに5年目に突入していた。

果たして大塚先生を失ってなお、本学をわが国随一の中東・イスラーム研究教育拠点として維持して行くことができるのか。残されたプロジェクト・メンバーの苦悩は深かったが、国から巨額の資金援助を受けている以上、拠点の形成・維持を断念するわけにもいかない。だがどうしたら、大塚先生を失った痛手を少しでも軽くすることができるのか？

そうやってたどりついた先にあったのが、突如主を失った大塚先生の一万冊近い蔵書だった。これこそ4年間のプロジェクト研究を支えた基本に他ならず、今後の拠点の維持・発展にも不可欠な資料であるに違いない……かくてAA研文献資料室に「大塚文庫」が誕生した。そこでは先生ご自身を記念する意味もあって、テーマ別の分類は行わず、故人の書架が忠実に再現されている。中東やイスラーム、また人類学の研究を志す者にとっては一種の聖地かもしれない。



最近iPadを手に入れた。電子書籍リーダーとしての使い方以外ほとんどしていないが、とても重宝している。

ネット上に公開されているファイルをダウンロードしたものや、自分で作った授業プリントなどをPDF化したものを入れて持ち歩いている。1000ページを超える内容が厚さ1センチの中に入ってしまったのだが、容量としてはまだスカスカだ。これでカバンがずいぶん軽くなった。それから複数の本を平行して読めるのも便利だ。今まで読んでいた本にしおりをはさんでカバンにしまい、別の本を取り出して開く、という手間をかけずに、画面に何度か触れるだけで、別の本に切り替わる。なかなか快適だ。

もっとも、最初のうちは画面上の文字を見ていても内容が頭に入ってこない感じがしていた。iPadの持ち方も危なっかしくて、落とさないようにと思ってかなり緊張していたのだ。やっぱり紙に戻ることになるのかな、と思ったりもした。しかし、人間は慣れる動物だ。違和感はいつのまにか薄れてきて、今ではiPadで読むという行為がかなり自然なものに感じられるようになった。多分、私の日常生活のアイテムとして定着するだろうと思う。

しかし、実はひとつ気になっていることがある。私はもともと、本を読みながらあまりメモを取らない。若いときにそういう習慣を身につけておくんだった、ということもあるが、もう手遅れだ。もちろん、まったくメモを取らないというわけではないのだが、論文を書いたり授業の準備をしたりするときは、「あの本にあんなことが書いてあったはずだ」と

か「あの論文にこんな例文が載ってたっけ」というような記憶に頼って、実際に「あの本」を引っ張り出してきて確認するということが多い。

さて、そういう確認作業をするときにも、普通は目標のページにしおりが挿んであったり欄外に書き込みがしてあったりしない。では「あんなこと」や「こんな例文」をどうやって探し当てるのか。もちろん、その本を読んだときの記憶に頼るのだ。たとえば「本の3分の2ぐらい行ったあたりで、右ページの下の方にあった」という具合だ。その辺りをぱっと開いて、話の流れを思い出しながら右下に注意を向けつつ前後にページを繰ってみる。ときには結局4分の1ぐらいの左ページの上の方だったなんてことがあったりするけれども、このやり方でだいたい見つかる。

仕事のやり方としては効率が悪い。だから絶対におすすめしないのだが、個人的には捨てがたい面もある。というのは、部分的にせよその文献を読み直すことになるので、新たな発見があるのだ。どうせ読み直すのならメモを取らなくても同じ、という屁理屈ではあるのだが。

気になっているのは、iPadで本を読むようになると「3分の2右下」式の記憶が出来なくなるだろうということ。検索はむしろ簡単になるので、仕事には差し支えないと思うのだが、だんだん私の本の読み方が変わっていくかもしれない。あるいは、もしかしたら、今は想像もできないような新たな記憶の仕方が身につくかもしれない。なんだか心配でもあり、楽しみでもある。



TUFS-ラーニングコモンズがオープンします!

2012年4月、図書館4階を改装した「TUFS-ラーニングコモンズ」(愛称「@ラボ」)がオープンします。学生の皆さんの主体的な学習スペースであるTUFS-ラーニングコモンズには、グループ学習ゾーン、PCゾーン、学習相談デスクを備えています。

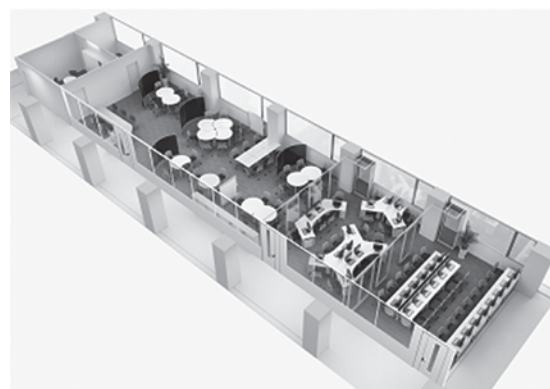
グループ学習ゾーンは、話しながら時にはリラックスして学習できる明るい空間で、移動式のテーブル・デスクを組み合わせることでさまざまな人数での学習ができます。ノートPC、iPadや、無線LAN環境、プロジェクタ・ICレコーダー・ビデオカメラなどの機器を備え、学習上の多様なニーズに応えます。

PCゾーンでは、総合情報コラボレーションセンター(ICC)の端末が利用できるほか、各種の講習会が開かれます。

学習相談デスクでは、本学大学院生の「多言語コンシェルジュ(P.6参照)」が、学生の皆さんのさまざまな学習上の悩みを聞き、解決への手

助けをします。多言語コンシェルジュは、TUFS-ラーニングコモンズをフルに活用しながら、学び方の技法(学術リテラシー)を向上させるアドバイスにも努めていますので、気軽に話しかけてみてください。きっと何かヒントが得られるでしょう。

どうぞTUFS-ラーニングコモンズを使って、新しい学習の世界を広げてください。



TUFS-ビブリオ 地域言語／専攻語の辞書案内

附属図書館ホームページにある「TUFS-ビブリオ」は、学生のための基本文献ガイドです。新しい語学にチャレンジする時、「地域言語／専攻語の辞書案内」がおすすめです。本学の先生

方が推薦する学習用の辞書が紹介されています。附属図書館に所蔵がある辞書は、OPACにリンクしていますので、手に取って試してみるのもよいでしょう。ご活用ください。

東京外国語大学附属図書館
Tokyo University of Foreign Studies Library

学生のための基本文献ガイド「TUFSビブリオ」

東京外国語大学附属図書館では、学生の皆さんが読書に親しみやすい環境をつくる試みのひとつとして、本学の先生方の協力を得て、各分野の「基本文献」を紹介する「TUFSビブリオ」を2010年10月に立ち上げた。

今春、新入生を迎えるにあたり、各地域言語の辞書案内を公開します。これまでの文庫・新書による語彙、言語・文学分野の文献紹介と同様、ご活用ください。なお、ここでは紹介している図書で本学図書館に所蔵しているものは、OPACの検索結果画面にリンクしていますので、ご利用ください。

この後も、さまざまな切り口からの文献紹介を掲載する予定です。皆さんがさまざまな書物にアプローチする際の、ご参考にしていただければ幸いです。

学生のための基本文献ガイド「TUFSビブリオ」

★地域言語／専攻語の辞書案内 (担当 各項記載)

英語	ドイツ語	ポーランド語	チェコ語
フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語
ロシア語	モンゴル語		
日本語	中国語	朝鮮語	
インドネシア語	マレーシア語	フィリピン語	タイ語
ラオス語	ベトナム語	カンボジア語	ビルマ語
ウルグアイ語	ヒンディー語	ベンガル語	
アラビア語	ペルシア語	トルコ語	

学生のための基本文献ガイド「TUFSビブリオ」

ヒンディー語辞書案内

- 古賀晴郎・高橋明編『ヒンディー語＝日本語辞典』(大修館書店、2006) xxix, 1439p.
収録語彙数が多いばかりでなく、例文が豊富で、使用法もマスターできる。巻頭に発音、文法概略を付している。
- 土井久弥編『ヒンディー語小辞典』(大学書林、1975) ii, 466p.
収録語彙数約2万3千のうち約3千語に*記号を付けて難単語であることを表示している。約6千語からなる日本語－ヒンディー語辞典も付録している。
- McGregor, R.S. ed., *The Oxford Hindi-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1993, xx, 1083p.
収録語彙数7万以上。学習者用として定評ある必携辞書。
- Bahri, Hardev, ed., *Learners' Hindi-English Dictionary*. Delhi: Rajpal & Sons, 1981, xix, 758p.
収録語彙数は約1万と少ないが、用法の解説が詳しく初學者向け。

<http://www.tufs.ac.jp/library/guide/biblio/tufsbiblio.html>

学習相談デスクで、先輩に相談してく？

If you have any difficulties with your studies, we will support you!

大学ではレポートやゼミ発表、卒業論文といった課題が出されますが、誰でもすぐにできるものではありませんし、初めてのときはわからないこともたくさんあるのではないのでしょうか。また、日頃の学習方法について戸惑いや迷いを感じたり、授業で紹介された文献を見つけられなかったりすることもあるでしょう。こうした学習上の悩みを相談できる場所として、2011年10月に『学習相談デスク』（以下、デスク）がオープンしました！ デスクでは本学の大学院生が『多言語コンシェルジュ』として、さまざまな言語・分野にわたって相談にのっています（詳細はデスクのHPをご確認ください）。

2012年4月以降は、附属図書館4階にデスクがリニューアルオープンします。文献の探し方やレポートの書き方・パワーポイントの使い方などに困った時は、学習相談デスクで先輩の院生にきいてみましょう。

相談に来ていただいた方からの、感想です。

論文の基本的なことから、とても丁寧に教えてくれました。今までも資料探し頑張ったかな…と思っていましたが、全く見たことも聞いたこともない資料を探し出してくださって、感激です！ 何より大学院生の堅苦しさ（イメージ）がなく、フレンドリーな方々で楽しかったです。

いやー、悩みを話せて良かったです。人に話しても「そっかー」で終わってしまう話でも、多言語コンシェルジュの方からは色々な答えが返ってきました。

学習相談デスクを利用して

本学附属図書館のラオス語図書、ラオス関係図書は、他大学の図書館に比べてかなり充実している。しかし、絶対量が少ないことから、レポートや卒論執筆の段になると、必ず学生から「参考文献がない、見つからない」という苦情を聞く。ここ数年、ラオス語専攻では図書館の協力で二年生の最初に検索ガイダンスを実施しているため、状況はかなり改善している。それでも実際のテーマを前に途方に暮れる学生は多い。

今回、そんな途方に暮れた学生に学習相談デスクを紹介した。絶対量の少なさはいかんともしがたく、検索の仕方で見られる結果に違いの出ることは実感してもらえなかったが、一人一人に丁寧に検索の方法、文献から文献へ芋蔓式に検索できることなどを教えてくださったそうで、それは今後のレポート執筆に役に立つ、勉強になったという声が多かった。具体的なテーマについて、個別に対応してもらえらることで、身につくことが多いように感じた。

ただ、一年生にとっては敷居が少し高いらしい。教員に言われなければ自分からは相談に行かなかったということなので、授業中の宣伝が効果的かもしれない。

（大学院総合国際学研究院准教授 菊池陽子（ラオス語））

多言語コンシェルジュは2012年2月現在、9人います。外大卒業生だけでなく、他大学卒業生も、留学生もいます。多種多様な言語・専門分野を持つ彼らは、みなさんの相談に対応するだけでなく、ワード講習会の講師役を務めたり、海外のオススメ新聞をピックアップしてレジュメ配布したり、と様々な活動も担っています。今回はデスクの「広報班」として活躍中の、[奥 真裕 × 木村 佑太 × 十亀 侑子]の3人に、学習相談デスクの仕事・やりがいと、新入生の方に向けて、将来の夢などを語り合ってもらいました。



「一緒に、もがきましょう」

——『多言語コンシェルジュ』に応募したきっかけを教えてください。

奥 院生室の掲示板で見え。

木村 あ、俺もそんな感じ。

十亀 私は、学部時代の先生からメールがきて。

木村 わざわざ？ 十亀さんは学習相談デスク(以下、デスク)に向いてる、と先生が思ったんだね。

十亀 苦労して論文書いた人なら向いてるかな。書くことが好きっていうのは、多言語コンシェルジュはみんな共通してるよね。

——学習相談デスクのお仕事は、どうでしたか？

奥 もっと甘くみてました。

木村 相談内容が…うーん、高校のテストみたいにどこかに答えが書いてあるものじゃない、という感じ。一緒に悩んで解決するっていう…。毎回、四苦八苦で。相手の相談内容をよく把握し、適切なアドバイスができるよう心がけてます。

奥 自分たちも、自分のテーマ以外で論文を書いたことはないし。それが先生との違いかな、って。院生として、

学生に近い立場で一緒に悩めるのが。木村 うん、多言語コンシェルジュとしての立ち位置。そこは最初に迷ったよね。

十亀 答えを出すより、一緒にもがくことを求められてるのかな、って。私が塾で講師をした時もそうだった。

奥 座談会のタイトル、『一緒にもがきましょう』にする？

一同 (笑)

——どんなときに、学習相談デスクのやりがいを感じますか？

十亀 特定の本じゃないけど「こんな本探してます」と相談され、こちらか

プロフィール

奥 真裕 (おく まさひろ)

1987年生まれ。大阪大学外国語学部地域文化専攻(トルコ語)を卒業後、東京外国語大学大学院 言語文化専攻 言語・情報学研究コース(トルコ語学)に入学、在学中。学部生時代はトルコのイスタンブールを始め、ウズベキスタン、アゼルバイジャンで遊学。その際、ヨーロッパの旧オスマン帝国領を1ヶ月かけて放浪。卒業論文では現代トルコ語のya(感嘆詞、接続詞)の形式と機能を扱い、現在は中央アジアのチュルク諸語を勉強しつつ、トルクメン語の従属節を作る形式について修士論文の執筆準備中。

木村 佑太 (きむら ゆうた)

1988年生まれ。東京外国語大学スペイン語専攻を卒業後、同大学院 国際協力専攻(国際法学)に入学、在学中。留学経験はなし。英語とスペイン語を話せる…かな? 卒業論文ではいわゆる「移行期正義(transitional justice)」について研究、1980年代の南米や90年代以降のアフリカ地域における、軍政から民主政への移行期の際の恩赦法制定について国際法の観点から分析を行った。修士論文では同問題について国際刑事裁判所との関係などからより広範かつ詳細な分析・研究を行う予定。

十亀 侑子 (そがめ ゆうこ)

80年代・昭和生まれ。東京外国語大学フィリピン語専攻卒業。現在、同大学院 言語応用専攻日本語教育学専修コース所属。2010年オーストラリアでの日本語教師アシスタントプログラムに参加。英語は生活に困らない程度。韓国語、中国語はちょっと触れた程度(ほとんど未習レベル)。現在スウェーデン語学習中。卒業論文では言語教育の孕む政治性・権力性を批判的に見つめ悩み、修士論文でも引き続きその問題に関して止揚を目指し奮闘中。

ら「こんな本どうですか」と紹介した時、後日「ありがとうございました!」と言われ、すごくうれしかった。

奥 専門分野に近い質問が来た時。自分が学部の卒論を書く時に感じたような不安を、みんなも感じているんだな、と。

十亀 むしろ、こちらの研究が何なのか、訊かれることがある。卒論のテーマを考えている3年生から、「何のテーマで、どうやって調べましたか?」とか。

奥 うん、テーマを考えてる時に来てほしいよね。

——自分だったら、どういう時に相談したいですか?

十亀 参考文献とか教えてくださいって、相談に行くと思う。

木村 自分の研究については主観的になりがちだから、客観的に見たら同じ院生に見てもらおうと助かるし。学部生だともっと助かるんじゃないかな。

十亀 違う視点からの意見がもらえる、ってことだね。

奥 最近、大学院の研究でも、他分野についてお互いに勉強しあうのが流行だし。

木村 俺も違う分野の人と話すと、自分の研究に役立つと思える時がある。

奥 僕は卒論の時に…途中で指導教官が替わり、結局は違う分野の先生に見てもらった。最初の先生と意見が合わなかったのもあるけど、自分の思い込みで研究の方法がつかめてなかったと思う。先生の他にも訊ける人がいたら途中で替えずにすんだのかも。

木村 今になって思い返せば、ね。俺も卒論で苦労して、一人で書き上げなきゃ!という気持ちになってしまったけど。もし、こんな相談デスクがあったら、頼れる人がいたら、もうちょっと効率よく書けた気もする。

奥 論文もいろんな人に見てもらえれば良くなるし、人からコメント

もらうのは大事だね。

木村 デスクの役割として、みんなにもどんどん使ってほしいな。

十亀 ゼミ発表前にちょっと相談、みたいな使い方でもいいよね。デスクでは評価も付けられないし、簡単なコメントを出すくらいだけど、それが新たな視点を生む場合もあるかも? できれば、敷居を高く思わないでほしい。

木村 敷居が高いと思ってる人、けっこういるみたいだね。「院生ってもっとお堅いと思ってました」と言われて…「こんなにフレンドリーだと思ってませんでした」みたいな(笑)。

奥 こちらも去年までは学部生だから(笑)。

木村 ちょっと先輩に相談、みたいな感じで来てほしいな。

十亀 話しかけてもらいやすいよう、私はデスクのパソコン作業に没頭しすぎないように気をつけてる。なるべく周りを見るようにして。

木村 パソコン作業もやってるけど、いつでも来てくださいと宣伝したいね。いつでも声かけていいんだよ、と。

——これから、どういう活動をしていきたいですか?

十亀 ブログを早く充実させたい。デスクのメンバーが自由に書き込める形で、どんどん情報を発信していきたい。

奥 どういう内容にしたいの?

十亀 まったく知らない相手には相談しにくいだろうから、ブログでデスクのメンバーを紹介したいな。それから、幅広い地域や言語について学会の情報を載せる、とか…。

奥 それは便利だね。とくに学部生にとっては、分野にこだわらずいろんな話を聞けたら、研究のテーマ選びにつながるだろうし。

木村 デスク主催の講習会もやっていきたい。学部生の頃、これを教え

ちょっと先輩に相談、みたいな感じで来てほしいな

てもらいたかった！というのをやれば。

奥 授業では教わらないことを教えてあげたいね。自分の時は、(役立つツールが)あるということすら知らなかったから。

十亀 あと、答えだけじゃなくて、プロセスを伝えたいな。検索ツールを使って、どうやってその情報にたどりつけるか、とか。

奥 うん。効率的にデータを入手する手段を、相談者にパソコンの画面を見せながら……直接、顔を見て話せるのはメリットだと思う。

木村 それ、大事だね。

奥 研究を続けていると、文献を自分で読むだけでなく、授業で先生の発したひと言とか、人に聞いた話が糸口になることも多いんだ。でも、後で先生は「そんなこと言っただけ？」なんて、忘れてたりして(笑)。

——学習のモチベーションが上がらない時、どうしていますか？

十亀 関係ないことをする。私の場合、旅行とか料理とか。レポートのことは、そればかりずーっと考えてて、突然ひらめいたら書く。

木村 俺は関係ないことをするのはできないな、焦っちゃって。やるならやる。課題を終らせてから遊ぶ。気がかりがあるうちは、他のことはできない。

奥 僕も先にやっちゃうね。夏休みの宿題は真っ先に終わらせるタイプ。

十亀 語学の勉強は、まずほっとく。自分を追い込んで、焦りだしたらやる！

奥 大阪時代トルコ人のネイティブを見つけるのも大変だったから、探して会って話すのが、僕は一番モチベーションが上がった。

十亀 私もフィリピン語のイベントに参加したなー。

奥 トルコ人を見つけたら、捕ま

える！とにかくトルコ語で話しかける！実はその人、めっちゃ日本語うまかったりするんだけど(笑)。

木村 語学への愛だね(笑)。俺は国際関係が好きで、国際法のゼミに入ったから、途中から語学のモチベが下がって…国際法のほうが、海外のニュースが面白く見られるとか、身近で利益がわかりやすい。でも、今は語学もムダじゃなかったと思ってる。スペイン語で現地の文献が読めたりするし。

——将来の夢は？

木村 「夢」というか目標だけど、将来は国際法に関係する仕事につきたい。外交官とかNGOとか。欲を言えば、国際裁判所の判事になりたい。国際法の研究をしている学生にとっては憧れなので。実際に、外大出身で判事になった人もいるから…先輩の後を追って、がんばれたら。

一同 おー！ かつこいい！

十亀 私は近い将来ですけど、がんばって卒業し、博士課程後期に進みたい。その間、図書館でのデスクの仕事とか、留日センターや日本語学校で経験を積み、数年後にスウェーデンに行って、研究できたらなって。

木村 なんでスウェーデン？

十亀 近々の配偶者がスウェーデン人だから(笑)。

一同 え、近々！？(騒然)

十亀 私は今、地域日本語教育を研究しているけど、地域で日本語を学習する人と会っても、学習者の立場にはなれないから、その人たちの視点を自分のものとして共有できない…。だから私も、移民のための語学学校でスウェーデン語を勉強してみて、教育システムとそこで行われていることを、教師の視点を持った生徒の立場から論文に書けたら。

奥 現実的だね(笑)。僕の夢は、学問で食べていけることです。日本では、トルコとかトルコ系の民族がまだ認知度が低いので、そういうのを発信していけるポジションにつきたいな。

木村 もっと日本人に知ってほしい、と。

奥 それと、日本語で書かれたチュルク語に関する一般書が少ないのも、気になってる。英語の文献では読めるけど…。

十亀 奥くんが訳してみたら？

——最後に、新入生みなさんに一言

奥 がんばれ！

木村 …それだけ？

奥 興味あることは「面白そうだな」だけでなく、読んだり、勉強したりしましょう。実際に動かないと…自分の頭の中だけで考えていても何も変わらないから、自分でやってみる！

十亀 私からは「ようこそ、外大へ」

木村 あとは何かある？(笑)

十亀 自分のペースで自分のやりたいことをやって、ちょっと困ったら、遊びに来てください。

木村 そうそう。

十亀 あ、遊びに来て、じゃないね(笑)。相談に来てください。

木村 四年間は長いようで短いので、その時間を有意義に使い、大学という場を満喫してください。そうした皆さんの大学生活における「学び」のサポートをできたら、と思っています。

(了)

ブログは、学習相談デスクのHPで更新中！

アメリカ・日本・アジアのはざまで

— 日本語教育者・長沼直兄の「激動」の戦前／戦中／戦後 —

大学院総合国際学研究院教授 河路 由佳

附属図書館では、社会貢献事業の一つとして、どなたでもご参加いただける公開講演会を毎年開催しています。平成23年度は特別展示と並行して河路 由佳 本学教授に講演していただきました。同講演会は平成23年12月9日(金)研究講義棟マルチメディアホールにて行われ、多数の聴衆が集まり学外の方も100名以上が参加されました。

長沼直兄は1894年、日清戦争のさ中に生まれ、太平洋戦争を中心に前後それぞれ20年余り、都合50年を日本語教育に従事して1973年に亡くなりました。初めの20年ほどはアメリカ人宣教師や語学将校を対象に、戦争中の4年間はアジアへの日本語普及に、戦後は占領軍の将校や宣教師たちに、やがては外国人一般に日本語を教え、今日の日本語教育の基礎を築きました。

19世紀末までアメリカで日本語を使う人といえはほとんど日系人に限られていましたが、20世紀に入って、軍事関係の必要から非日系人の日本語学習が始まりました。米国陸海軍は日本の情報収集目的で語学将校を日本に送り日本語学習をさせました。1923年から長沼直兄が担当したのは、このプログラムでした。ここで長沼直兄は入門から超級まで学べる教科書、『標準日本語讀本巻一〜七』(1931-1934)を完成します。この教室はThe Naganuma School、教科書はNaganuma Readersと呼ばれました。

1941年日米開戦が迫ると教室は閉鎖され、一方で文部省と興亜院は日本語教育振興会を設置、長沼直兄は求められてその理事に就任します。この組織は、「大東亜圏」への日本語普及を目的として設立され、当初は専ら中国に向けて、やがて、フィリピン・ジャ



講演風景

ワ・マライ・ビルマなど東南アジアに範囲を広げ、調査研究、教科書等の刊行、派遣教員の養成事業などを行いました。長沼直兄は調査研究・出版事業の責任者として教科書等の出版を多く手掛け、研修会では日本語教授法を講じました。短期の研修を経てアジア各地に派遣された数千人規模の日本人日本語教師は現地の言語を解さず、日本語だけで教えることが求められました。入門用教科書『ハナシコトバ』の長沼直兄による教師用指導書は、直接法による授業の進め方がシナリオのように書かれたものです。これは派遣教員のみならず、日本国内の留学生教育やその他の地域でも、直接法による初期指導の手引書として珍重され、今日の直接法による指導法の基礎となりました。

一方、戦争中アメリカに持ち帰られたNaganuma Readersはアメリカ陸海軍で採用され、多くの複製版が印刷されて使われました。ここで学んだ人々が戦後アメリカでの日本語の指導者となり、アメリカでの日本語学習は質量ともに飛躍的に充実することになります。

戦後、長沼直兄は理事長として日本語教育振興会の解散申請を決定し、新たに財団法人言語文化研究所を設立しました。占領期にはGHQからの依頼で米

軍の日本語教育にも当たりました。彼らや欧米人宣教師らの協力のもと、1948年には附属東京日本語学校を設立しました。これは再びThe Naganuma Schoolと呼ばれ、Naganuma Readersの戦後の改訂版『改訂標準日本語読本巻1～8』は世界各地で使われました。

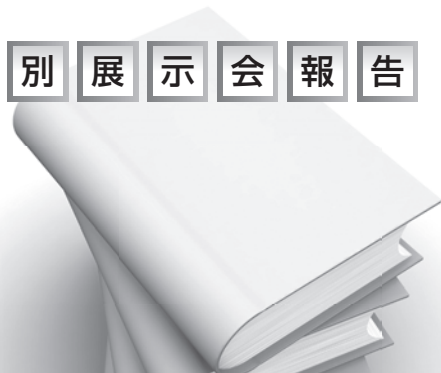
長沼直兄は目標言語のしぐみに習熟するための方法の探求に余念がありませんでしたが、習得した言語をどう使うかは学習者の領域であるとして踏み込

もうとしませんでした。

アメリカとアジアでは日本語学習の歴史も事情も大きく異なりますが、いずれも長沼直兄を必要とし、長沼直兄はそれに精一杯応えつつ教授法や教材の開発に励んだのです。日本語教育を巡る状況の大きな変化に苦悩しつつも怯むことなく、一心に一筋の道を生き抜いた生涯でした。今も長沼スクールでは世界各地からの学習者が日本語を学んでいます。

平成23年度附属図書館特別展示会報告

戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育 —長沼直兄の仕事を中心に



平成23年11月18日から12月25日まで、本学附属図書館2Fギャラリーにて、平成23年度附属図書館特別展示会を開催しました。今回は、学校法人長沼スクールより当館に寄贈された「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」を日本語教育者・長沼直兄の仕事にスポットを当てながら紹介しました(監修・解説:河路 由佳 本学教授)。

長沼スクール(旧:財団法人言語文化研究所)から、国内外で用いられた日本語教科書・教材等286点の書籍は「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」として附属図書館に、書籍以外の一次資料は本学国際日本研究センターに寄贈された。(財)言語文化研究所(2009年度より改組改称され学校法人長沼スクール)は、1941年8月に文部省内に設立された日本語教育振興会の財産をひきついで1946年3月に長沼直兄によって設立され、長沼直兄の著作を含む戦前・戦中・戦後の資料を保管してきた。

このコレクションは大きく分けて次の二種類から

成る。

A:1941年8月に文部省内に設立された日本語教育振興会(1941-1946)の出版物はじめその蔵書やその他の一次資料。

B:長沼直兄の米国大使館日本語教員時代(1923-1941)や占領期の米軍将校らへの日本語教育関係、戦時でも日本語教育振興会とは別の活動として出版した本など、長沼直兄に関わるA以外の出版物やその他の一次資料。

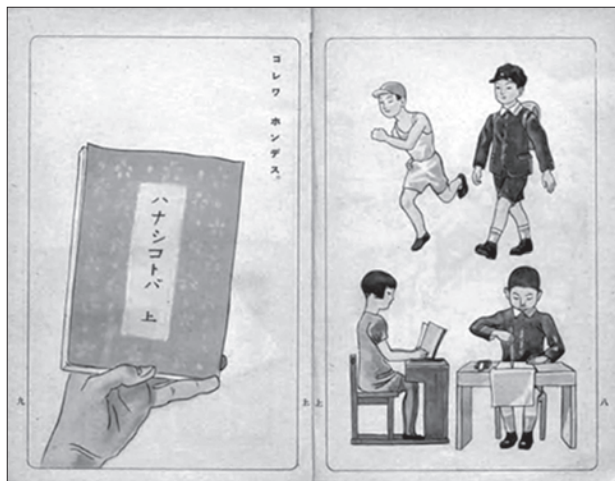
日本語教育振興会は「大東亜圏内における日本語普及」のための調査研究、教材作成、教員養成などを統

括的に行なう機関であったから、Aの日本語教育振興会による出版物は、アジア向けのものである。

戦後の日本語教育に大きな影響を与えた長沼直兄の著作も含まれる。統括的機関であったことから、同時代の日本の内外各地の日本語教科書など日本語教育関係の書籍が集められており、コレクションにはそれらも含まれている。

Bは、米国大使館での日本語教授から生まれた長沼直兄『標準日本語讀本』(1931-1934)を中心に、戦時中の米国におけるその複製本や戦後の改訂版など。また、戦時中に日本語教育振興会とは別に長沼直兄が著した『First Lessons in Nippongo』、そして占領期に米軍総司令部参謀第二課日本地区語学科の日本語主任を務めた時期の長沼直兄の著作など、戦前・戦中・戦後の長沼直兄に関わるA以外の蔵書や一次資料である。特に『改訂標準日本語讀本』は戦後、日本の内外で広く使われ、大きな影響を及ぼしている。

日本語教育振興会は、まず民間の日語文化学校内に置かれたが、改めて文部省内に設置されたのは、1941年8月であった。大陸の学童向けの日本語入門書『ハナシコトバ』(当館請求記号:日教資/1/1~3)は、既に東亜同文会によって初版が発行されていた



『ハナシコトバ 上』文部省 1941年(?)



『コドモノセカイ』黒崎義介画 1942年

が、日本語教育振興会設立後は、同振興会がその刊行を引き継いだ。作成したのは文部省の勅令によって設けられた「日本語教科用図書調査会」であった。1939年より文部省囑託であった長沼直兄は、この作成時から意見を述べたという。B6判の薄型、オールカラーの絵本風の作りで上・中・下の3巻から成る。全体にことばは少なく、特に上巻の初め、4~8ページは絵だけで文字がない。一カ月程度の研修を受けて現地に赴いた6,000人を越える日本人日本語教員は、絵本のような教科書を与えられただけでは途方に暮れたに違いない。彼らのために、この教科書には、懇切丁寧な「指導書」(日教資/1/4~6)が作成された。『ハナシコトバ』の1ページのために、指導書は5~6ページ、直接法での授業の進め方がシナリオのように書き込まれている。執筆者は長沼直兄である。

長沼直兄は1941年8月に文部省内に日本語教育振興会ができるとその理事に就任、1946年の夏に同振興会が解散するまで(それを決定したのも長沼直兄である)、特に教科書を始めとする出版物の責任者として、日本語教育振興会による出版物の計画から発行までを担当した。「支那学童用絵本」シリーズは、日本語教育振興会によって1942年に中国向けに発行された。日本の文化や日本語に好意と憧れを持ってもら



おうという意図から上質であることが求められ、当代一流の絵本作家に依頼された。『コドモノセカイ』（日教資/1/46）は黒崎義介による。

日本語教育振興会において日本語普及事業にかかわる以前は、長沼直兄は米国大使館の日本語教員を務めていた。『標準日本語讀本』全七巻は、米国大使館での実践から生まれた入門から超級に至る体系的な教科書である。欧米人を対象とした一人の著者によるものとしては、空前絶後のものであるといっても過言ではない。

『標準日本語讀本』全七巻の初版（1931－1934）（日教資/5/1～7）は、米国大使館内部での使用に限られたため、外部の目に触れることはなかった。やがて日米関係が悪化すると、米国大使館での日本語教授も存続不能となった。1941年8月、長沼直兄は米国大使館を辞し、文部省内に新設された日本語教育振興会に活躍の場を移したのだった。

一方、米国大使館で長沼直兄に日本語を習った人々は、長沼の教科書を米国に持ち帰った。日本語のわかる人材はアメリカ陸海軍にとって必要で、最上の教材として長沼直兄の『標準日本語讀本』全七巻が選ばれた。長沼直兄の知らぬうちに、米国でコピー版が何種類も作られた。日本文学者のドナルド・キーン、サイデンステッカー

らもこれで学んだ。そればかりか、長沼直兄の配布プリントに基づく副教材も印刷された。

さて、そうした事情もあって、戦後日本にやってきたアメリカ人将校らの中で、長沼直兄は広く知られていた。日本語教育振興会が戦争目的の団体で

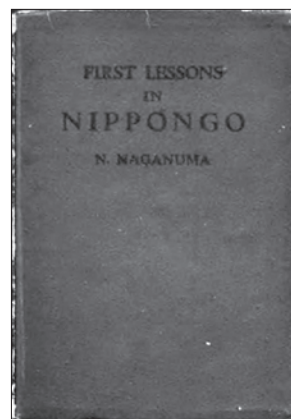


『標準日本語讀本巻一』
長沼直兄 1931年

あったにもかかわらず、彼らは長沼直兄を頼って日本語教育振興会に日本語教授を要請、日本語教員養成講座も連合国軍の依頼によって実施された。連合国軍の日本語教室で、長沼直兄は、『改訂標準日本語讀本』（日教資/5/21～28）の作成に着手、1950年には開拓社から一般市販用に刊行され、その後、長く版を重ねた。

『First Lessons in Nippongo』は、長沼直兄が日本語教育振興会の仕事をしている時期に、それとは別に作成した英語による日本語教材で、初版は1945年2月に刊行された。1942年9月から1943年10月にかけて現在のJapan Times社による英文週刊誌『Nippon Times Weekly』に連載された日本語学習欄をまとめたもので、全50課で日本語の基本文型が学べるようになっている。東亜の英語話者が対象だと説明されていた。この本は戦後間もない1946年2月に同じ紙型を用いて再版（日教資/5/20）された。この時点では対象学習者は、アメリカ人を主とする連合国軍関係者であった。

同書は1952年に一部改訂され『First Lessons in Japanese』と書名も改まるが、その後1990年代まで版を重ねた。



『FIRST LESSONS IN NIPPONGO』
1946年

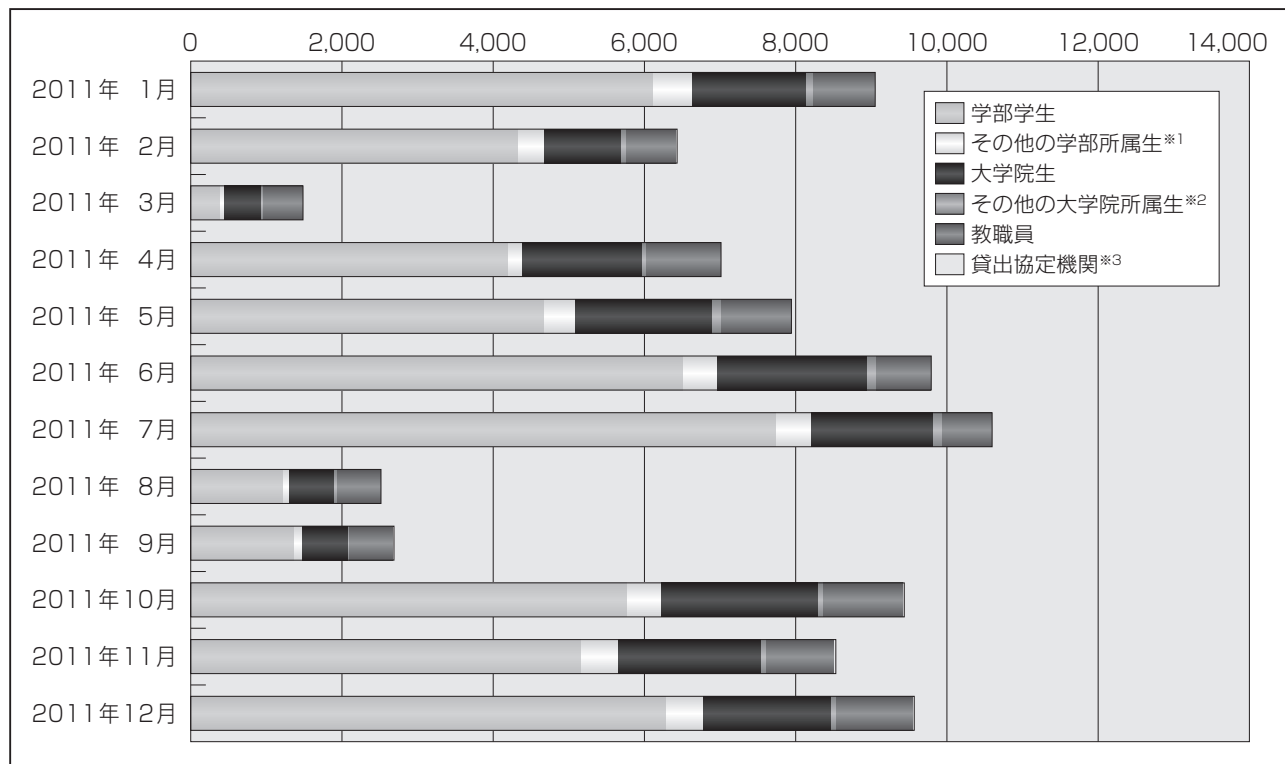
長沼直兄は、生涯を通して日本語を教えると同時に調査研究、教材開発に取り組み、今日の日本語教育の基礎を築いた。残された資料との新たな出会いを経験していただけたらと思う。

【解説パンフレット】

http://www.tufs.ac.jp/blog/is/g/news/tenji_booklet_23.pdf

図書館統計

貸出冊数統計



貸出冊数統計

[期間: 2011年1月～2011年12月]

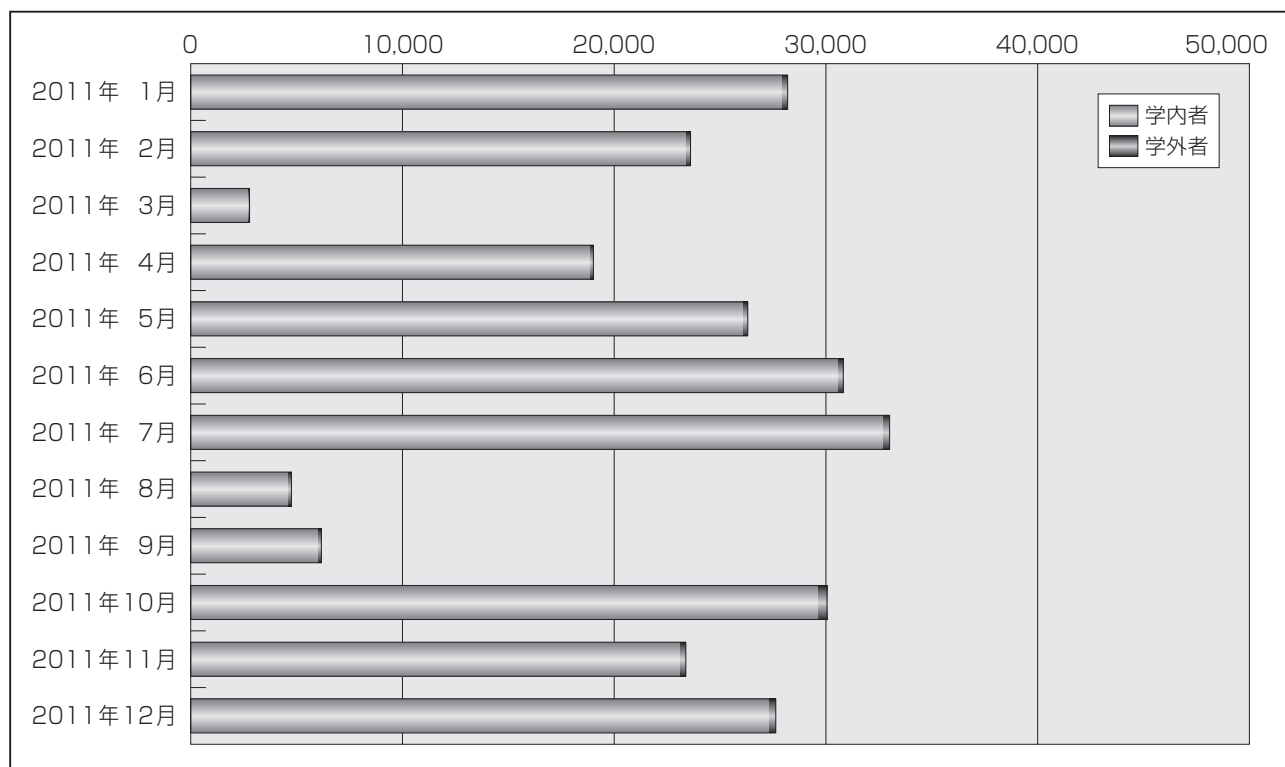
	2011年1月	2011年2月	2011年3月	2011年4月	2011年5月	2011年6月
学 部 学 生	6,104	4,320	376	4,186	4,661	6,504
その他の学部所属生*1	519	343	54	182	418	455
大 学 院 生	1,509	1,023	495	1,598	1,813	1,979
その他の大学院所属生*2	91	69	27	46	116	113
教 職 員	815	659	531	993	921	727
貸出協定機関*3	14	18	2	8	15	15
合 計	9,052	6,432	1,485	7,013	7,944	9,793

	2011年7月	2011年8月	2011年9月	2011年10月	2011年11月	2011年12月	総 計
学 部 学 生	7,736	1,214	1,357	5,767	5,161	6,278	53,664
その他の学部所属生*1	454	83	113	442	484	493	4,040
大 学 院 生	1,614	595	609	2,086	1,888	1,693	16,902
その他の大学院所属生*2	125	32	9	55	71	66	820
教 職 員	661	585	585	1,063	898	1,010	9,448
貸出協定機関*3	8	7	15	23	29	28	182
合 計	10,598	2,516	2,688	9,436	8,531	9,568	85,056

※1 学部研究生や科目等履修生などを含む。 ※3 貸出協定を締結している機関を示す(2012年2月現在、国際基督教大学のみ)。

※2 大学院研究生や大学院特別聴講生を含む。

月別入館者数統計



月別入館者数

[期間: 2011年1月～2011年12月]

	2011年1月	2011年2月	2011年3月	2011年4月	2011年5月	2011年6月
学 内 者	27,892	23,367	2,693	18,831	26,062	30,535
学 外 者	300	239	85	185	247	284
合 計	28,192	23,606	2,778	19,016	26,309	30,819

	2011年7月	2011年8月	2011年9月	2011年10月	2011年11月	2011年12月	総 計
学 内 者	32,666	4,561	5,991	29,617	23,069	27,283	252,567
学 外 者	342	195	178	434	315	349	3,153
合 計	33,008	4,756	6,169	30,051	23,384	27,632	255,720

東京外国語大学学術成果コレクション登録件数・利用状況

東京外国語大学学術成果コレクション (Prometheus-Academic Collections) とは、東京外国語大学の研究・教育成果および史資料を収集し、広く一般へ公開することを目的とした機関リポジトリです。インターネットを介して、学術論文や史資料本文を閲覧することができます。(2008年3月正式公開)

コレクション別のアイテム・アクセス・ダウンロード数

[期間: 2011年1月～2011年12月 ※アイテム数: 2012年2月末現在]

コレクション	アイテム数	アクセス数	ダウンロード数
研 究 成 果※2	2,468	75,246	100,597
博 士 論 文	80	7,397	31,508
C-DATS※3	34,815	47,210	21,585
附属図書館※4	2,944	6,703	690
合 計	40,307	136,556	154,380

※1 ダウンロード数

※2 本学紀要論文を収録(「アジア・アフリカ言語文化研究所」、「留学生日本語教育センター」発行分も含む)

※3 21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」により収集された史資料および刊行物を収録

※4 図書館報および「南アジア史資料デジタル・アーカイブズ(SARDA)」等を収録

★詳細は、<http://repository.tufs.ac.jp/doc/index.html>をご覧ください。

- 4月 6日 …… 入学式(館報「カスターリア」等配布)
 4月 6日 …… クラスガイダンス(全15回 ～12月)
 4月11日 …… 計画停電および節電への協力等のため4月の開館時間変更(平日9-18時 土日休館 ～30日)
 4月19日 …… 図書館オリエンテーション(全5回 ～26日)
 4月22日 …… 国立大学図書館協会東京地区協会総会 2名参加(於 東京学芸大学)
 4月26日 …… 情報リテラシー科目附属図書館担当分講義「附属図書館利用案内」(全4回 4月28日と計2日間)
 5月 6日 …… 5・6月の開館時間変更(平日9時-21時45分 土9-17時 日休館 ～6月30日)
 5月24日 …… 図書館ガイダンス(全3回 ～26日)
 5月26日 …… 平成23年度第1回図書館委員会
 6月14日 …… 情報リテラシー科目附属図書館担当分講義「情報検索演習」(全4回 6月16日と計2日間)
 6月16日 …… 第58回国立大学図書館協会総会 2名参加(於 広島市)
 6月20日 …… 情報検索ガイダンス(全5回 ～30日)
 6月28日 …… 東京西地区大学図書館協議会加盟館会議 1名参加(於 杏林大学三鷹キャンパス)
 6月29日 …… 平成23年度第1回選書委員会
 7月 1日 …… 7月の開館時間変更(平日9時-21時45分 土日9-17時 ～23日)
 7月23日 …… オープンキャンパス図書館見学
 9月29日 …… 駐日ポルトガル大使一行来訪
 10月 3日 …… 多言語コンシェルジュによる学習相談デスク開設(～2月17日)
 10月17日 …… 図書館オリエンテーション(全3回 ～24日)
 10月20日 …… 情報検索ガイダンス(全5回 ～27日)
 11月 2日 …… 平成23年度第2回選書委員会
 11月14日 …… 東京西地区大学図書館協議会実務担当者会議 1名参加(於 一橋大学)
 11月18日 …… 平成23年度附属図書館特別展示会(「戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育―長沼直兄の仕事を中心に」～12月25日)
 11月20日 …… オープンキャンパス図書館見学
 12月 9日 …… 平成23年度附属図書館公開講演会(河路 由佳 本学教授「アメリカ・日本・アジアのはざまで―日本語教育者・長沼直兄の「激動」の戦前／戦中／戦後」)
 12月12日 …… 出張コンシェルジュ(学習相談)実施(全3回 ～14日)
 1月31日 …… Word講習会実施(多言語コンシェルジュ企画)
 2月 8日 …… 平成23年度第3回選書委員会
 3月19日 …… 平成23年度第2回図書館委員会
 3月26日 …… 附属図書館4階改修工事(ラーニングコモンズ)完了

昨年(平成23年)の東日本大震災では府中市は震度5弱で、当館も図書約15,000冊が落下しましたが、幸い人的被害はなくその他の物的被害も軽微でした。3月中は一部エリアのみの開館(3/17～31)となり、夏学期も電力事情や補講に対応して開館時間変更を行いました。その後、図書落下防止対策や災害対応体制の整備等を行い、より安心して利用できる図書館であるよう努めています。

編集後記

- 昨年の大地震では大量の本が落下し、建物の一部が損傷しました。それを受けて書架の高い段には滑り止めのシートを敷きました。まだ万全ではありませんが、緊急時の避難誘導・点検についても計画を策定しています。(吉田)
- 外語大図書館のスタッフになって約1年、震災の日からも1年になります。自分の身边にも小さきさまざまな変化が起きました。平穏な日常のありがたさを忘れぬよう、日々すごしていけたらと思っています。(大浦)
- 今回の特集記事では、学習相談デスクの担当者達に座談会をしていただきました。インタビュー中の、笑いの絶えない楽しそうな様子や担当者達の雰囲気が伝われば、と思います。どうぞお気軽にご相談にいらしてください。(木村)
- 多言語コンシェルジュと、この春スタートするTUFFS-ラーニングコモンズで、図書館は学習サポートの場への歩みを踏み出しました。この一年以上、準備に明け暮れた日々でしたが、いつになく楽しみな春を迎えています。学生の皆さんに親しまれ、役立つことを願っています。(綾部)

Castalia: 東京外国語大学附属図書館報 第19号

2012年3月30日発行

発行: 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電話: 042-330-5193 ホームページ: <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

印刷: 三鈴印刷株式会社